

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】

太田 知彩

【所属】(助成決定時)

立教大学 大学教育開発・支援センター 助教

【研究題目】

「グローバル人材」育成をめぐるポリティクス—国際教育交流担当教員の視点から—

【研究の目的】(400字程度)

経済活動および労働市場のグローバル化を背景として世界的な人材獲得競争が激化しており、欧米や東・東南アジアの研究では、留学は「エリート」の再生産戦略として位置づけられ、「出身階層—留学—地位達成」という三者の関連が明らかにされてきた。こうした動向を踏まえ、これまでの研究で「グローバル人材」の当事者である学生やその家族に注目し、現代の日本社会においても留学を通じた「エリート」の社会的再生産が生じていることを明らかにした。ただし、そこでは日本人学生の留学の在り方を議論するうえで重要なアクターである大学の影響については検討することができていない。以上を踏まえ、本研究は、グローバル人材政策が全国の大学でいかに受容されたのかについて、国際教育交流担当教員が学生を選抜する論理に着目して明らかにすることを目的とした。以上をこれまでの研究と接続させて、現代日本における留学を通じた「エリート」の社会的再生産のメカニズムを考察した。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究では、日本全国の大学で国際教育交流とりわけ日本人学生の留学送り出し業務に携わる教員に対する半構造化インタビュー調査を実施し、「国際教育交流担当教員はいかなる論理で留学生を選抜しているのか」という問いを検討した。この問いを解明するために、まず、①「グローバル人材」(政策)や海外留学の目的・意義に対する国際教育交流担当者の認識を確認したうえで、②どのような学生が留学に「ふさわしい」と認識しているのか、③交換留学生の選定に際して、(学業成績や語学力以外の側面で)どのような側面を重視しているのかという3点を検討した。この作業を通じて、国際教育交流担当教員がグローバル人材政策をいかに受容し、学生を(無意識的に)選抜しているのかを検討した。

なお、一口に大学といっても多様であり、各大学の社会的な位置づけによってグローバル人材政策に対する反応も異なることが予想された。そこで、本研究では、上述した問いについて、各大学の国際教育交流担当教員が「日本人大学生全般」の場合と「自身の所属先の大学生」の場合でそれぞれどのように認識しているのか、両者の間にいかなる相違が存在しているのかという点に注目して調査・分析を進めていった。これによって、たんに大学内において学生が留学に選抜されていく過程だけでなく、大学間で留学生が階層化されていく過程を描出することを目指した。

調査対象者の選定に際しては、①地域(首都圏—地方)、②設置形態(国立—私立)、③選抜性(高偏差値—低偏差値)、④歴史(伝統—新興)という4つの軸を基準として、調査対象者の多様性に留意しつつ、研究協力者の確保に努めた。その結果、全国の大学で日本人学生の留学送り出し業務に携わる11名の教員にインタビューを実施した。インタビューの所要時間は1時間半程度であった。

【結論・考察】（４００字程度）

主な知見は次の二点である。第一に、研究協力者は留学相談や交換留学生の選考過程において、英語力や GPA のような認知的能力よりも「やりたいこと」の有無を重要視していた。とくに過去の経験やライフコース展望との関連において、留学であることの必要性が評価の対象とされていた。第二に、研究協力者の所属大学の社会的な位置づけの違いによって、留学に対する意味づけとくにキャリアとの関連性に違いがみられた。相対的に選抜性の低い大学の教員は、留学を直接的に具体的なキャリア形成に役立てることを語る傾向にあった一方で、選抜性の高い大学の教員はそうしたキャリアとの関連ではなく、多様な価値観の尊重や異文化理解といった文化的・市民的観点に基づく留学の意義を強調する傾向にあった。以上から、大学内部で「望ましい留学動機」に基づいた留学生選抜が行われていること、また、大学間で留学生が異なるように社会化されており、大学教員が留学生の社会的選抜において重要な役割を果たしていることが示唆される。